

西遊記

吳承恩 作 村松暎 訳



必読選定
文研児童読書館

西遊記

訳者 村松 暎
発行者 佐藤武雄
印刷・製本 図書印刷株式会社



発行所 文研出版
東京都文京区向丘2丁目3-10
TEL(03)814-2151
大阪市天王寺区大道4丁目128
TEL(06)779-1531

© 1971 Printed in Japan

N. D. C. 923 西遊記
文研出版 昭和46(1971)
248p 23cm
必読選定
文研児童読書館

著者との契約により換印廃止

西^{さい}

遊^{ゆう}

記^き

浜^{はま} 村^{むら} 呉^ご
田^た 松^{まつ} 承^{しょう}
弘^{ひろ} 暎^ひ 恩^{おん}
康^{やす} 訳^{やく} 作^{さく}
絵

文
研
出
版



文研児童読書館のねがい

わたしたちは、わたしたちをとりまく、さまざまなものからいろいろ学んで大きくなっていきます。学校での学習からも、テレビやマンガからも、科学や知識を身につけ、また楽しみを味わいながら育っていきます。

けれども、せっかちに知識ばかりを自分のものにすることや楽しさだけを急いで追うあまり、ともすれば、人生の真実とは何か、人間として、どのように生きていくべきか、ほんとうの美しさとは何か、というようなたいせつなことを、忘れがちになるようです。これは、とても残念なことです。

そうならないために、わたしたちは人生の教師としての文学、ただしい生き方を身につけさせてくれる読書というものをたいへん重要なものと考えています。

このたび、わたしたちは、多くの著者、訳者、画家のご協力によって、今なお新鮮な感動を与えてくれる世界の名作文学、貴重な文化遺産である神話や民話、さらに伝記、ノン・フィクション、または未紹介の新しい力作などを選んで、文研児童読書館として、おとどけすることになりました。

みなさんがたの必読基本図書として、いつまでも愛読していただけるものと信じています。

編集委員

いしもりのおお
石森延男
昭和女子大学教授・日本児童文学学会会長

うまだとしろう
植田敏郎
一橋大学教授・日本児童文学学会理事

しらき しげる
白木 茂
日本児童文芸家協会常任理事

せき ひでお
関 英雄
日本児童文学者協会理事長

なかかわまさふみ
中川正文
京都女子大学教授・日本児童文芸家協会理事

かくたきよと
福田清人
前立教大学教授・日本児童文芸家協会理事長

文研出版編集部



も
く
じ



沙 悟 浄	猪 八 戒	袈 裟 の 難	緊 箍 呪	悟空、三蔵の でしになる	観音菩薩の 旅	悟空の 負け	またもや大さ わぎ	天兵と戦う	如意金箍棒	石猿の王様
135	120	111	100	91	67	61	45	36	25	11



人	参	果	破	門	黄	袍	怪	悟空を呼びもどす	宝のひょうたん	金角大王・銀角大王	悟空の名医	賽太歳	旅のおわり	あとがき	『西遊記』について
.....															
140	154	162	172	184	196	208	217	232	243	245	243	232	243	245	245

絵・浜田弘康



西^{さい}

遊^{ゆう}

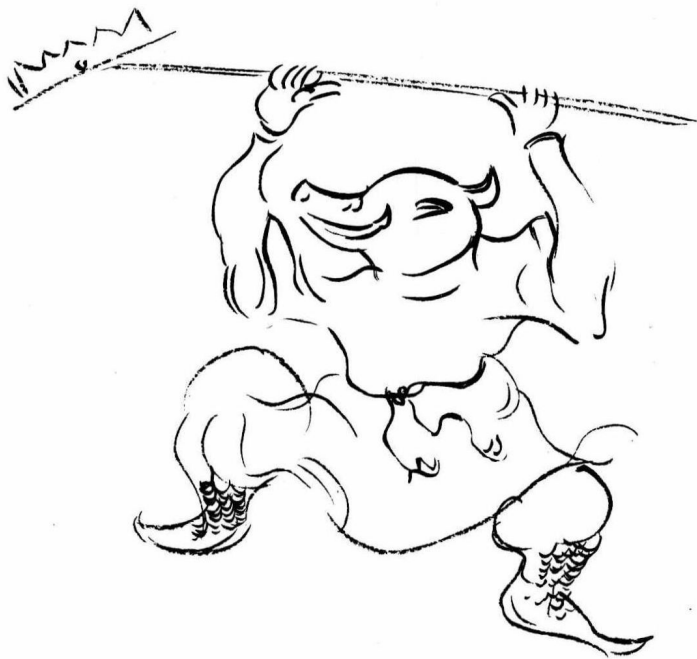
記^き

村^{むら} 呉^ご

松^{まつ} 承^{しょう}

暎^{えい} 恩^{おん}

訳^{やく} 作^{さく}





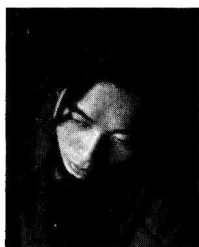
村松 暎（むらまつ・えい）

一九二三年、東京に生まれる。

慶応義塾大学文学部卒業。現在慶
応義塾大学教授。中国文学専攻。

一九五六年、六七年に中国を訪問
した。

児童向きの中国小説の翻訳『今古
奇観ほか』（盛光社）ほかに『毛
沢東の焦慮と孤独』『警説史記』
『中国列女伝』（以上中央公論社）
などの著書がある。

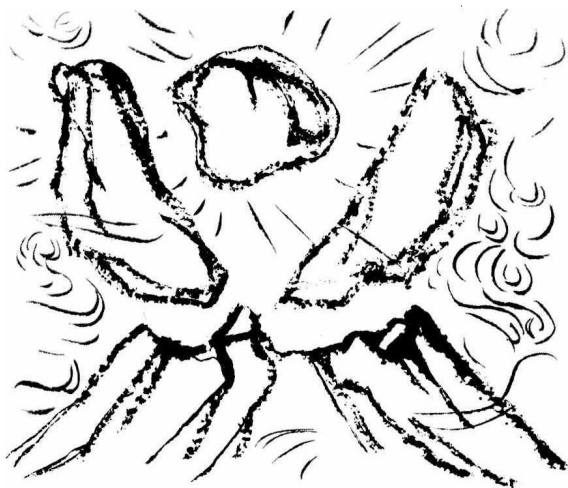


浜田 弘康（はまだ・ひろやす）

一九三五年、大阪に生まれる。

一九五八年から自由美術協会出品、
作家活動にはいる。朝日新人展、
大阪新人選拔展、壁画集団等参加、
個展十四回開く。自由美術協会会
員、日本美術家連盟会員。





石猿の王様

遠い遠い大むかし、天と地とはごちやごちやにまじりあっていた。それが長い年月のたつうちに、清くすんで軽いものは上にのぼって天になり、にごって重いものは下にしずんで地になった。

こうして天地がわかれると、地上には東西南北に四つの大陸ができた。その東の大陸、東勝神州に倣来という国があり、海にのぞんでいたが、その海のなかに花果山という山があった。

この花果山の頂上に大きな石があったが、長いあいだ天地のめぐみをうけているうちに、不思議な力をもつようになり、ある日、パツとまっ二つに割れたと思うと、まりほどの大きさの石の卵をうんだ。

卵はそこにごろがって風にふかれていたが、それがまた長い年月のたつうちに、風化して一匹の石猿になった。

石猿はすぐに、そこに住んでいたおおぜいの猿と仲よしになり、毎日、木へのぼったり、山をかけま

わったりして遊んでいた。と、ある暑い日のこと、猿たちは谷川で水あびをしていたが、なかの一匹が、「この水は、いったいどこから流れてくるんだらう。みんなでさがしにいつてみようじゃないか」

「それはおもしろい」

相談がまとまって、猿たちは谷川の上流のほうへ、どこまでものぼっていった。すると、大きな滝のところにでた。

「なるほど、この滝が水源だったのか。しかし、滝の中はどうなっているんだらう。だれかあの中へとびこんでようすを見てくるものはないか。もしそれができたら、おれたちの王様にしようじゃないか」

猿たちが、こんなことをいっていると、

「よし、おれがやろう」

と、進みでたものがあつた。れいの石猿である。

石猿は目をつぶって、ザブーンと滝つぼの中に身をおどらせてとびこんだ。底について目をあけてみると、水も波もなく、からりとしていて、前方に橋が一つかかっている。橋のむこうはりっぱな御殿で、その前に『花果山福地 水簾洞』ときざんだ石碑が立っている。

中をのぞいてみても、人の住んでいるけいはない。これを見とけると、石猿は身をひるがえして、みんなのところへもどった。

石猿から話をきいた猿たちは大よろこび、

「そんなにいいところなら、みんなでそこに住むことにしようや、おい、案内してくれよ」

「よしきた」

石猿がまっ先に滝つぼにとびこむと、ほかの猿たちも、あとにつづいた。

「これはすてきだ」

猿たちはみんな大よろこびで、かん声をあげて御殿の中をかけまわったり、寝台の取りあいなどしている。石猿は大声をあげて、

「おい、みんな集まれ。さっきの約束はうそじゃあるまいな。滝つぼの中のようすをさぐって、みんなのために、こんないい住みかを見つけてやっただから、きょうからはおれが王様だぞ」

「はいはい」

猿たちは石猿を上座にすえて、その前にならぶと、いっせいにおじぎをして、石猿を王様にした。

石猿はこうして王様になり、おおぜいの猿どもをしたがえて、毎日、楽しく暮らしているうちに、いつしか四、五百年の年月が流れた。

ある日のこと、石猿の王様は家来の猿たちを集めて酒もりをしていたが、きゆうにハラハラと涙をながした。家来たちはおどろきあわてて、

「大王さま、なにを悲しんでいますっしやいますか？」

「わしは、いまこそこうして王としての生活を楽しんでゐるが、いつかは、閻魔大王につかまって、死ななければならぬ。死んでしまえば、いっさいがなかったのとおなじことだ。これが悲しまずにいられようか」

それをきいて、猿どもはみんな、しょんぼりしてしまった。と、一匹の猿が進みでて、

「大王さま、将来のことを心配なさるようになつたというのは、道にころぎすお心が生じたためでございます。この世に、閻魔大王でも手のとどかぬものが、三つあります。神さま、仏さま、それに仙人です。そのどなたかについて、不老不死の道をお求めになつたらよろしいではありませんか」

「そうか。ではわしは、あした、さっそく旅にでる。そして海のかなた、地のはてまでさがして歩き、かならずその神さまか仏さまか仙人をたずねあて、不老長生の法を学ぶとしよう」

石猿は、さっそく家来に命じていかだをつくらせ、それに乗つて海に浮かびでた。運よく、毎日、東南の強い風がふいたので、いかだは西北にむかつて順調に進み、かれを南の大陸へ運んでいった。

岸につくと、石猿はひよいと砂浜へとびおりたが、おどろいたのは魚や貝をとっていた人たち、

「ひやあ、化けものだ！」

と、われさきにと逃げだした。石猿は、なかにひとり腰をぬかして動けなくなっている人を見つけ、その着物をはぎとつて、見よう見まねでそれをからだにつけると、

「これで、少しは人間らしくなつただろう」

